

研究課題：口腔機能は大腿骨近位部骨折術後のリハビリテーション効果の予測因子となり得るか

研究者名：岸本 裕充¹⁾、足立 了平²⁾、芝辻 豪士^{1,2)}、中村 純也²⁾

所 属：¹⁾ 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座、²⁾ ときわ病院歯科口腔外科

緒言：大腿骨近位部骨折術後に受傷前の歩行能力に回復するのは最大で約 2/3 とされ、リハビリ効果の予測は難しい。近年リハビリに対する栄養の重要性が見直されてきた。高齢者でリハビリを要する患者は低栄養・サルコペニアを認めることが多く、口腔機能の低下はフレイルやサルコペニアのリスクになる。先行研究として、「口唇閉鎖の可否」と「舌の運動機能」が Functional Independence Measure (FIM) 得点と関連を認めたとの報告があるが、その研究では口腔機能は定量的に評価されていないため、本研究では大腿骨近位部骨折術後患者の口腔機能を定量的に測定し、身体機能との関係を検討した。

対象および方法：大腿骨近位部骨折術後に、ときわ病院の回復期リハビリ病棟に入院して、通常のリハビリを受けた患者を対象とした。入院時から退院時までの 1 か月ごとの口腔機能・身体機能の測定および入退院時の栄養状態の評価を行い、口腔機能・栄養状態と身体機能との相関関係を解析した。測定項目は口腔機能として①最大舌圧、②咬合力、③口唇閉鎖力を測定し、身体機能として①運動(M)FIM 得点、②握力を測定した。栄養状態として血清アルブミン値と理想体重・現体重から geriatric nutritional risk index (GNRI) を算出した。統計解析には JMP PRO 13.1 を使用し有意水準は 5% とした。ときわ病院倫理審査承認済（審査番号 R2-2）

結果および考察：被験者は計 58 名（男性 6 名、女性 52 名）であった。女性の握力と入院時 M-FIM 得点 ($r=0.46$, $p<0.001$) および握力と退院時 M-FIM 得点 ($r=0.51$, $p<0.001$) には有意な相関関係を認め、舌圧と入院時 M-FIM 得点 ($r=0.66$, $p<0.001$) および舌圧と退院時 M-FIM 得点 ($r=0.58$, $p<0.001$) にも有意な相関関係を認めた。舌圧は握力よりも身体機能との相関が強く、握力と同等もしくはそれ以上に身体機能を予測する因子になり得ることが示唆された。また、入院時 GNRI と入退院時 M-FIM 得点 ($r=0.62$, $p=0.03$) および入院時 GNRI と退院時 M-FIM 得点 ($r=0.46$, $p=0.03$) にも有意な相関関係を認め、栄養状態の低下は身体機能の低下とも関係することが示唆された。被験者数は 6 名と少ないが、男性にも同様の傾向が見られた。

結論：口腔機能としての舌圧は大腿骨骨折術後リハビリ前後の身体機能を予測する一助となる可能性が示唆された。